

ご挨拶

日本教育オーディオロジー研究会 会長 大沼直紀

●東北教育オーディオロジー研究協議会の運営が順調に進み、今回のこの研修会が開催出来る運びとなったこと、心よりお喜び申し上げます。研究組織はさらに安定感が増したと思います。実は、十日前、日本の教育オーディオロジーの歴史の中で記憶に残る出来事がありました。北海道教育オーディオロジー研究協議会が復活したことです。

●北海道では10年ほど前から聴覚を活用する教育に対する風当たりが強くなり始め、その後は聾・難聴教育の先生方が学校の中でも外でも、補聴器や人工内耳、聴能訓練や発音指導などについて話をすることがはばかれる重苦しい雰囲気となってしまったのです。もちろん、補聴器などについての研修会は一切開かれません。新任者が参加する手話の研修会は盛況ですが、教育オーディオロジーの存在は否定されていったのです。

●そのように聴覚活用の面では暗黒の時代が続きました。そのため北海道教育オーディオロジー研究協議会は休眠を余儀なくされ、ついには解散という事態に至ったのでした。北海道の先生方には長い間聴覚活用に関する勉強の機会が失われ、保護者達にもその意義が伝わりにくい状況でした。

●ところが、手話による教育だけでは片手落ちではないかと気付く親や教師が自然に現われることとなります。一方に偏りすぎた教育方法に疑問を持ち始めたのでした。その後も紆余曲折はありましたが、北海道にもう一度聴覚活用の意義や補聴器・人工内耳の使い方などを学ぶ場があるべきだという認識が高まり、一度つぶれてしまった研究協議会を再建しようという機運が盛り上がったのです。

●そして、先々週、組織の名前を「新・北海道教育オーディオロジー研究協議会」とし、設立総会と研修会が十年ぶりに開かれたのでした。私は会の顧問に指名され、記念講演をしました。「教育オーディオロジーの果たす役割と展望」という演題です。その前日には仙台で全国聾学校教頭会が開催されました。この会でも私が記念講演をしたのですが、ほぼ同じ内容の話をしました。講演の中でいくつかの「私の期待と展望」を述べました。その中の一つは、特別支援教育の中にあつて聴覚障害教育を担当する教員の専門性の低下をどのように食い止めるかということです。

●学校教員の世界ではなかなか弟子が育ちにくいという問題があります。医師の世界のような師弟関係が生まれにくいという問題があります。教えを乞いたい師匠を見つけ、アプローチし、いつしか勝手にでもいいから自分の恩師にしてしまう。それぐらいの気概が必要です。その意味で、この教育オーディオロジー研究会という組織は、師匠や弟子を見つける場としてこれまでも多くの実例があります。聴覚障害教育こそが特別支援教育の源流をつくったという歴史を知り、この教育に当たる教師は自らの専門性にもっと自信を持つことを期待したいのです。

●私が昔著わした「教師と親のための補聴器活用ガイド」があります。これまでの研修会で中心的なテキストとして読まれてきた本です。この続編として、この秋に「教育オーディオロジーハンドブック」が出版される予定です。私が監修を務めますが、執筆分担者は全員が教育オーディオロジー研究会の研修会でこの教育に目覚め、成長し、上級講座で講師を務めるようになった、いわば私の弟子たちにお願ひしました。この東北教育オーディオロジーの会員からも優秀な講師が育ち跡を継いでいくことでしょう。大いに期待し、お祝いの挨拶といたします。